＜巻　頭　言＞

ダムと社会の今日的あり方を考える

～ インフォームド・コンセントと広報ユビキタス ～

太　田　信　介*

渇水や洪水が頻発していた時代，ダムはその効果が人々に実感され，近代化・経済発展の象徴として国民に受け入れられていました。効果が当然視されるようになると水没地域や環境の問題が強調され，ダムは財政の悪化とも相まって公共事業見直し議論の矢面に立たされることとなりました。こうした状況に対し，ダムの実施者の側では，環境アセスメントやパブリック・コメントの導入を通じ，その必要性とマイナス面への配慮について社会の理解を得る努力がなされてきました。しかし，現在も各流域で進められているダム計画の見直しにおいて，ダムを悪者扱いする社会的風潮は根強いものがあります。ダムの将来を広く議論するためには，このような現実を直視し，社会との新たな関わり方を考える必要があると思います。

多くの人命と財産を奪った東日本大震災を経て，自然災害への対策の必要性について，国民の関心と理解は高まったように思います。近年，前線の長期停滞や各地のゲリラ豪雨の被害がニュースで報じられるにつれ，人々の異常気象による災害への不安感は増しているようにも感じます。昨年発表された気候変動に関する政府間パネルの第５次報告書では，降雨の不確実性が高まるとされ，不安が現実になりつつあります。ところが，豪雨によって河川が氾濫した下流地域からは，災害の原因はダムの放流操作ミスだとの誤解がまことしやかに流布する状況にあり，ダムの役割への理解はとても十分だとは言えません。

ダムの水文上の働きは，水路が水の空間的偏在を調節するのに対し，水の時間的偏在を調節することにあり，極めて明らかです。洪水時にはダムへの大量の流入水を短時間貯留し，下流の堤防への負荷を軽減します。年月単位の長期スパンでは降雨時の流水を貯留し，渇水時にかんがいや上工水の需要に応じて用水を補給します。ダムの持つ時間調節機能を他の施設で代替させるのは困難だという専門家には当然のこの事実を，関係者に分ってもらう工夫が重要だと考えています。その際，この機能は，洪水が起きず雨が適度な間隔で降った場合は部分的にしか発揮されず，ダムの効果は降雨の変動性に大きく作用されることも正しく伝えるべきだと思います。

国民理解については，筆者が永年関わってきた農業基盤整備においても十分な状況にあるとは言えません。数年前に予算が大幅削減された際にも，営々と整備されてきた農業生産のための社会資本が守れなくなることを危惧する報道は一切ありませんでした。筆者はこれを機に，国や県，土地改良区の皆さんと事業の進め方や広報のあり方について，各地でワークショップ形式による人材育成に取り組んでいます。水路事業の進め方に関しては，

*（一社）地域環境資源センター 相談役，国際かんがい排水委員会 名誉副会長

既存施設の健全度に応じた適切な長寿命化を図る時代となっており，行政主導で施設を新設した当時の方法を，インフォームド・コンセント型に改めてはどうかと提案しています。

インフォームド・コンセントは，「正しい情報を得た（伝えられた）上での合意」を意味する概念で，医療の分野では一般的に行われています。担当医師に求められるのは，患者の症状を明らかにし，治療法の選択肢を幅広く考えられる医学上の能力に加え，検討の結果を患者にできるだけわかり易く伝えられる対話能力だと言えます。この概念を農業水利施設に当てはめれば，施設の劣化度と通水中断のリスク，さらには改修方法の選択肢を詳しく情報提供して，受益者や費用を一部負担いただく市町村に選択を委ねるということになります。

広報については，広報ユビキタスという概念を広めています。ユビキタスの用語はIT分野で使われ，コンピュータやネットワークが生活に溶け込んでいる状態を言いますが，語源は「いたるところに存在する」という意味のラテン語です。広報を通常の業務と切り離し，特別なものとして考えるのでなく，通常業務の中のあらゆる局面で広報の概念を取り入れ，より良いコミュニケーションを計ろうという考えです。ダムで言えば，パブリック・コメントや環境アセスメントを行う際，これらを事業実施上の単なる手続きと考えず，利害関係者とのコミュニケーションのチャンスだと考えて対応するということになります。

広報で伝えるべきは，施設とその役割は当然ですが，施設に関わる組織や人々の努力がより重要だと話しています。本年４月に韓国で開かれた第７回世界水フォーラムに，筆者は国際かんがい排水委員会のフォーラム対策委員長として参加しました。このフォーラムでは，世界の水資源の約７割を使っている農業分野の節水への努力を「見える化」して伝えることを目指しました。各国の国内委員会から，かんがい技術者と農家をはじめとする関係者が効率的な水利用に汗を流している姿を撮った写真を集め，パネルにして展示しました。技術者は，ともすると努力の成果としての構造物を世に示したがりますが，完成までの努力の姿こそが人々の共感や信頼を呼び，構造物にも劣らず重要だと信じています。

ダムと社会とのつながりをどのように考え，対応して行けばよいかについて私見を述べました。我が国のダムに関しては，新設ダムの技術開発に加え，既存ダムの機能向上や戦後を中心に得られた我が国のダムに関する多様な知見を世界に広めるといった課題があると考えています。ダムが多くの関係者の理解を得ながらその役割を果たしていく上で，本稿で述べた取り組みが参考になれば幸いです。

第7回世界水フォーラムでの国際かんがい排水委員会のパネル展
（左：大邱会場，右：慶州会場）